



韓国の子どもたちと地域児童センター

皆さん、ご存じでしょうか。お隣の国、韓国に児童館に似た施設があります。日本と全く同じ機能ではありませんが、放課後を中心とする子どもたちの支援活動を行っています。昨年から育成財団は、韓国の児童館関係団体と情報交換をしており、職員有志で昨夏ソウルを訪問してきました。今号から4回にわたり、韓国の児童館事情をお知らせします。

「貧困地域の子どもを支える「コンバン」」

まずは、韓国の子どもたちを取り巻く状況や社会情勢について確認したいと思います。

韓国は儒教思想もあり、長らく女性の専業主婦層が多かったのですが、女性の社会進出は進んでおり、共働き率も高くなりました。加えて、日本以上の学歴至上主義で、受験戦争の様子は日本でも報道されているところ。そのため、幼児期からの子育てと受験というのがセットになって、課題になっている家庭が多くあります。

その一方、韓国は経済的に厳しい時代が続きました。1950年代の朝鮮戦争以来の経済危機、産業化も相まって、農村から都市への人口流入が激化しました。これにより、多数の低所得者層居住地域が発生しました。また1997年のアジア通貨危機により、厳しい緊縮財政を強いられることになりました。これを境に、さらに貧困地域が拡大することになり、格差は社会問題として顕著となったのです。現在でもその流れは止まることなく、ひとり親家庭や貧困児童の対策が求められています。

韓国では経済的にゆとりのある層は、子どもたちを塾などに通わせている場合が多いですが、貧困地域においては放任状態にあります。このような子どもたちを民間のボランティアベースで支えてきたのが、「勉強部屋:コンバン」でした。コンバンは、個人での運営から、さまざまな法人による運営まで多種多様です。日本の放課後児童クラブに近いかもしれません。

コンバンは、貧困地域の児童支援をベースにしながらも、多様な活動を展開していくようになり、韓国の児童福祉法上の施設「地域児童センター」へと発展していきました。その背景には、利



▲おやつや(一部)夕食も提供する

用者や職員が声をあげていき、法制化してきた歴史があります。地域児童センターは韓国全土に広がり、約2,700カ所あります。2004年のスタート時には250カ所しかありませんでしたので、4年ほどで約10倍に急増したということが分かります。利用人数は登録制で7万2,800名ほどになっています。このうち、貧困家庭が8割、ひとり親家庭が5割にのぼります。

西大門地域児童センターの取り組み

私たちが訪問したのは、^{ソンデムン}西大門地域児童センターです。写真では分かりにくいと思いますが、地域の中にとけこんでいる小さな家庭的な建物です。館内は、キッチン(キムチ専用冷蔵庫もありました)や図書コーナー、屋上には遊具が配置され、ダイナミックな活動はできませんが、心穏やかに過ごせる空間づくりがなされています。

登録児童は小学校1~6年生の約35名(平均利用人数は20~25名)となっていますが、友達を連れてきてもよく、フレキシブルな対応が可能です。利用者のほとんどが低所得者層で、家庭あるいは子ども自身に課題を抱えています。スタッフは常勤2名、非常勤4名で対応し、心理治療にも力を入れているそうです。9時から21時まで開所し、職員はソーシャルワーカーとして、家庭や役所との連絡調整や相談に応じているとのこと。どこも国家資格の社会福祉士が配置されており、専門的な援助を展開しています。



▲周囲にとけこむ地域児童センター

この地域児童センターを運営している団体は、社団法人小さい愛を分かち合う会(通称ブスロギ)と言います。1986年に発足し、2000年に法人化されました。今後、育成財団とブスロギは連携して日韓の児童館関係者の交流事業をスタートさせたいと考えています。韓国側は日本の児童館に学ぼうとしています。我々が学ぶべきところも多くあります。

今回は、ブスロギのもう一つの事業の柱、中高生世代の支援施設1318Happy Zone(ハッピーゾーン)についてご紹介します。

<参考文献・サイト> 朴 珠鉉「韓国の子どもの放課後」——児童心理2009年2月号臨時増刊「アフタースクール」金子書房2009
社団法人小さい愛を分かち合う会<http://www.busrugy.or.kr/>(韓国語)